まじこい　～金眼の男～

キール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじこい　～金眼の男～

【Ｎコード】

Ｎ８７７２Ｘ

【作者名】

キール

【あらすじ】

どうも初めまして、キールと言います。取りあえずこの話は、社会の荒波（笑）に呑まれて荒んだ心の少年が、川神市と言う変態の巣窟で織りなすコメディです、多分。主人公は最強系になると思います、多分。とにかく始まります。

真剣で俺の就職先は何処だ　1（前書き）

金色の眼は特に意味はありません。
伏線でも無ければ邪眼でもありません。

真剣で俺の就職先は何処だ　1

朝の洗礼――激しい陽光が街を照らしていく。
川神の街には、通勤する労働者と下駄ばきの生活者たちが闊歩する。彼もその一人。
黒髪――特にこの街においては――彼はあまり目立った容姿で無い。ぶっきらぼうに吊りあがった目つきが唯一の特徴だろう。どこか皮肉気な、物静かな雰囲気。彼はそんな印象の少年だった。
着ている物は浮浪者然とした姿で所々切れの入った上下黒の服装、髪も乱れており、前髪が長く垂れ下がっている。大きな荷物の入ったリュックを背負い川神の河川敷を渡り歩く。

「たく、なんだってんだ一体」

誰に言うわけでなく呟く。

「今度こそ就職しなくちゃこちとら飢え死にだよ。就職難って言うが、何で俺までこんな目に遭わないかんのだ」

皮肉気にそう呟く。

「へー、あんた就職先探してんの？」

横からの声に、男は別に気にした様子も無く返す。

「ああ、そうだよ。何故か雇ってもらって一日目に首になるんだ。前にいた所で働く所全部でそう言われたからここまで出稼ぎにきたんだ。まあ、元々宿なしだけどな」

「そう言うのを宿六って言うんでしょ」

「よく知ってんな」

「えへへ～。前に大和から聞いたんだ」

「そうかー、じゃあぶん殴られる前にその後ろに引きずってるタイヤと共に消えろ。あと五秒でキレそうだ。早くしないと内臓を裏返しにしそうだ。これは大変だ」

横を歩く赤髪の少女は、不思議そうな眼差しで男を見る。体操着姿のその少女は、タイヤを引きずって、男の隣を並んでいる。男を見上げるように少女は覗く。

「だいじょーぶー。あたし強いんだから」

「ほー、そりゃ大変だ。蛇の死骸でも投げつけて来るのか？　それともボールに火をつけて投げつけて来るのか？　それとも２Ｂ弾を一杯に詰め込んだネコの死骸を投げつけてくんのか？」

「なめてんの？」

「？　いや、前に俺のいた街じゃあそんな事日常茶飯事だぞ。中には胃袋いっぱいに火薬を詰め込んだ犬を投げてたやつもいたな。ちなみに俺はぬいぐるみの中に――」

「もうやめて、聞きたくないわ。アンタ一体どんな所で育ったの？」

その問いに、男はふむと顔を上げて考え込む。

「何って言われてもなあ、至って普通に笑顔でみんな破壊された公共物を復旧したり破壊したりと普通の街だぞ。ちょっとボウガンとかホルムクロムを大量所持してたヤツもいたが、まあ、普通だな。俺の住んでた公園には湧水もあったし。ああ、そういや、この間復旧作業自己新記録を叩きだしたつってたな。あれは早かった」

身じろぎをして、少女はうめく。

「アンタの住んでたって言う街には絶対に行かないわ」

今度は男が不思議そうな表情をする番だった。

「？　なんでだ？　まあ、確かに時々水道で爆発が起こったり暴力の化身が時々町を破壊したりするが、普通だろこのくらい」

「どこがよ」

と、その時。

「妹に何をするパンチ！」

その声が聞こえると共に激しい風切り音を立てて、何かが頬を掠め、前髪が何本かハラリと落ちる。頬を指でなぞると指に血がにじんでいた。どうやら切れたようだ。

飛んできたであろう、その方向へ視線を投げる。

拳を突き出して立っていたのは女性、長い黒髪で長身――彼よりも上背だ――その整った顔には挑発そうな笑みを浮かべている。彼はふと思った、得物を狙う肉食獣とはこんな顔をしてるのだろう、と。

飛んできたのは女性の拳だろう。距離は数メートル離れている、

が、彼女の強力な拳圧が自分の頬を掠めたのだ――おそらくはわざと。

女はそのままの笑みで、男を見る。

「人の妹に手を出すとは、いい度胸だな貴様」

男は、はっと鼻を鳴らして、女を睨み返す。その顔には皮肉気な笑みと、拳圧によって晒された太陽の様に燃える金色の瞳が、邪悪な輝きを放っていた。

これが男、倖村蓉馬と川神一子、川神百代との出会いだった。

真剣で俺の就職先は何処だ　1（後書き）

初めまして、キールです。一応、大学生です。子供の頃に見た風の大陸とロードス島にあこがれて書いてみました。こんな駄文ですが、応援ヨロシク(してくれるなら)です。

真剣で俺の就職先は何処だ　2（前書き）

主人公は、色々悩んで、やっぱり一番好きな小説の主人公のジョブにしました。

真剣で俺の就職先は何処だ　2

「はっ、ここじゃあいきなり人に拳を向けんのか」

隣にいる赤毛の少女に向けてのつもりで囁く。が、少女はすでにいなく、前に出て行っていた。

「お姉さま！」

「おー、妹よ」

駆け寄ってくる少女を抱き上げる、長身の女。「私の妹――」おそらく、あの少女は、あの女の妹なのだろう。蓉馬は嘆息した、どうやらまた、面倒事になりそうだ。彼は確かな確信の下、そう呟いた。

蓉馬は後方へ飛んだ。何処からか、弓矢が居た場所へと突き刺さった。蓉馬は身を翻し弓矢が飛んで来た方へと、向いた。河川敷にかけられた陸橋から、藍色の髪の少女が、弓を構え、蓉馬を狙っている。

蓉馬は理由を考える事を頭の片隅に追いやり、とにかく身体を動かした。背負っていた荷物を外し、それを盾代わりにする。荷物に弓矢が突き刺さっていく。

周りを見る。女は面白そうに薄い笑みを向けている。少女を――わずかな期待を込めて――見やるが、どこか期待のこもった様な眼差し向けている。

そして、弓矢が止んだ。彼はそれを訝った、がそれも一瞬。来たる脅威に対し勘が囁くそれに従い、身体は彼の意識とは別にすでに動いていた。身体をひねり、突き出されてきた衝撃の軌道を左の腕で逸らす、間にあったのは奇跡だった。あと少し遅かったらあの鉄

拳は蓉馬の顔を砕いていただろう。左手に走る激痛がそれを如実に語る。おそらく、左手はもう使えない。
鉄拳を繰り出したのは、やはり女だった。先ほどまであった距離は一瞬の間に埋められ至近距離で見合っている。そして、蓉馬は見た、獰猛な笑みの下に獣の様な本性を。
彼女は、即座に腕を引き、反対の腕からも鉄拳を繰り出そうとしている
蓉馬は叫んだ。

（ざけんな）

売られたケンカを買ってやると言った趣味は無いつもりだが、いわれもなく殴られてやる趣味も無い。
蓉馬はふみ込み、前進をした。息と息が互いの身体に触れ合うのを感じる。一瞬、その美貌に見とれそうになったが、自制する。
蓉馬は女の拳が身体に触れる寸前に、その激しい弾丸のような正拳突きから逃れるために身体を回転しながら、通り抜ける。
通り過ぎて、即座に反転して蓉馬は手刀を女の後ろ首へと当てようとするが、女は体を右へ捌いた――蓉馬の手刀は空を切るだけだった。
女は体を左回転させてその勢いに乗じた、後ろ蹴りを蓉馬の銅へと当たる様に振り上げた。
激しい衝撃にむせかえりながら、彼は胸中でまた叫んだ。

（ざけんな）

そして、彼は意識を手放した。

「いや、ほんとにすまん」

ぱんっと手を叩き、拝むように許しを乞うているのは長身の女。
川神百代は床へと向い
ていた視線を包帯まみれの男――蓉馬へと、視線を転じた。
包帯にぐるぐる巻かれて、ぐもったような声で、蓉馬。

「あばらと顔が痛むがな」

「すまんの、うちの者が勘違いで君を傷つけてしまったようじゃの」

「これを傷っつーか？　普通？　明らかに殺意がこもってたぞ。それにな、勘違いで横腹に１２発、顔面に３４発もいらねえんだよ。しかも最後はご丁寧に川に沈めようとしやがった。これ傷害じゃなくて殺人未遂だろ」

川神鉄心、世界屈指の最強の武芸者が集うこの場所で、最高の位置に君臨する事実世界最強とも言える翁。孫娘の非礼を詫びに来ていた彼は、蓉馬の皮肉に長いひげと眉毛に隠れた顔には苦笑を浮かべていた。
広い医療室に、翁と百代、一子の他に数名の人間がいた。
蓉馬はなんとなくそれを見渡した。ニヒルな少年、バンダナを被ってこちらを興味深そうに見つめてる少年、陰気そうな――矢を射った――少女、影の薄そうな少年。
あとは……

「おい、謝罪にくんだったら放し飼いにしてるゴリラ入れてんじゃねえよ。舐めてんのかてめえら」

「誰がゴリラだこらあ！」

怒気を上げるその男は、蓉馬を睨みつける。

「おい、お前、怪我してるからって調子に乗んなよ。ボコすぞ」

「けっ、そのうすぎたねえ面を二度と人さまの前に晒せねえ様にしてえつうんなら相手にしてやんぜ」

と、にらみを効かせている蓉馬の横に、一子が近寄り、つんっ、と肩の先を指をつついた。

悲鳴ではない、地を引き裂く様な、呪詛めいた低い唸り声を上げながら、蓉馬は悶えたしばらくその状態で蓉馬は声が出せず、一子を睨み、ただ意味不明な音を出しているだけだった。

「そんな状態でよくあんなふうに皮肉を言えるわね」

一子が関心したように言う。

「うわ、痛そう」

影の薄い少年は気の毒そうにいまだ悶えてる蓉馬を眺める。それに対し、バンダナの少年はさらに興味が出たのか、期待に瞳を輝かせ、隣のニヒルな少年に耳打ちをする。

「なあ、大和。こいつファミリーに入れてさ、みないか？　おもし

れえぞ。こいつ」

「キャップ。いきなりそんな事を言ってもさ。まずは相手を確かめないと」

「私は反対」

と、蓉馬に矢を討った少女が横から（ニヒルな少年の隣）口を挟む。その断固とした口調に二人は（言うのは分かってはいたが）たじろぐ。

少女は続ける。

「あんなヤツ入れたくない。腕は立つようだけど……でもそんなんじゃないよ。あんなの……」

一子に弄ばれている蓉馬に視線を転じ、付け加える。

「ヤクザだよ」

その呟きが聞こえた、蓉馬以外の全員、おもわず吹き出しそうになった。

～おまけ～

「しかるに、百代よ」

鉄心は、周りにに誰もいない事を確認して、誰もいない通路で孫娘を呼び止めた。

「お主も油断したものよの」

鼻で笑う様に、百代は鉄心へ視線を向ける。

「何の事だ」

「誤魔化すでない。傷は隠せても血の匂いは隠せんぞ」

観念して、百代はシャツの裾を上げた。鉄心は驚愕した。予想はしていた、臭いから、彼女は負傷をしていた事を。だが、そこに刻まれていた傷跡は、

「……毒か」

肩に薄紫の斑点が円形状に広がっている。即効性の毒だ、だが、肩が異常も無く動いている所を見ると劇薬と言う事なのでは無いのだろう。わずかに安堵する。

が、百代は苦虫を噛み殺したように、吐き捨てる。

「ああ、鉄針に毒をぬっていやがった。あの男、ただものじゃない。あれは暗殺者の技だしかも生半可なものじゃない、あれは一つの技を極めた殺人者だ」

殺人者。あまりいい感情の無い単語が、百代の口から告げられる。倖村蓉馬、あまり聞かない名である。自分の孫娘にここまで手傷を負わせるぐらいならば名が知れても良いだろう、だが、川神院で

も倖村蓉馬と言う男など知らない。
ふと、あの金色の眼が脳裏に掠る。
思えば、あのような目も珍しい。不気味な輝きを称えたあの瞳。最初見た時、思わず身体がすくんだ。
闘気から感じるものでも無い、殺意でも無い、なら、この恐怖感は何だ？
殺人者。つまるところこれなのだろう。鉄心は自分に言い聞かせるようにひとりごちた
（？）
どこか違和感を感じ、鉄心はかぶりを振った。
百代は唾棄するように、続ける。
「しかも、ご丁寧に急所を外している。殺そうと思えば何時だって殺せたろうに」
そして、あさっての方向へ視線を転じた。みえないが、鉄心には分かった、彼女の表情が。それ故に、驚愕を隠せなかった。
「じじい、私は別に思いあがっているわけじゃない。だがな私は強い。それこそ、四天王あるいはお前の若い頃くらいには。だが、あの男にはそんなの関係が無いんだ。強さなんて関係が無いんだ」
まるで、自分に言い聞かせてるかのように繰り返す。いつもと違う、薄い笑みを浮かべながら。
「関係無い、あの男は、本気になれば誰だって殺せる」

真剣で俺の就職先は何処だ　2（後書き）

キャラの造形モデルは、あの蒼い目をしたあの人です。
そして、それにちょっこと、四次元背中のあの人も入ってます

真剣で俺の就職先は何処だ　3（前書き）

お待たせしました

真剣で俺の就職先は何処だ　3

川神院で過ごし始め、一週間が過ぎた。
怪我は癒えた。蓉馬の体から包帯はすでに取れていた。かつて包帯が巻かれていた右腕の個所を撫でながら、蓉馬は院の中を歩いていた。痛みはもう無い。この川神院では怪我人の扱いに慣れているらしい（そのほとんどは百代が原因らしい）。後遺症も無く、体も問題無く動く。
蓉馬はそれを確かめるように院内を歩いていた。ひどく久しぶりに人間らしい生活を送った所為か――特に胃の辺りに――違和感があった。

（それもどうかって話だよなあ）
苦笑が浮かぶ。ここ最近、というか思い出すのが難しいほど前から続いた超絶極貧生活が脳裏を掠る。
涙が出てきた、よく生きてたな、と思う。
貰った服の裾で涙をぬぐう。大和がサイズが合わなくなったと言われて貰い受けた服は着古した感があったが、今まで着ていたのよりはマシだった。サイズもぴったりだったので文句は無かった。所々から変な匂いがしたのと京の視線が気になったが。
いつの間にか、蓉馬は川神院の道場に足を運んでいた。ふと見ると、そこには彼女がいた。

「はっ、やっ、はぁあああっ！」

勇ましい掛け声を上げ、一子が薙刀を振るっていた。
鋭い突き、激しい振りを繰り返して、薙刀の空を切る音が道場内に響き渡り、そしてかき消されていく。間の無いその連続。蓉馬は眺めていた。だからか、背後の人物に気づかなかった。

「怪我はもう完全に治った様じゃの。いくらなんでももう少しかかると思っておったが」

振り向く。別段おどろきはしなかった。ここで完全に気配を消すなんて芸当が出来るのは限られているからだ。そう、この老人の様な。

蓉馬は鉄心へ訊ねる。

「何の用だ？　まさか俺の容体が気になったからとか気色の悪い事言うんじゃねえだろうな」

鉄心は冷ややかに返す。

「遠慮なく飯を食い散らす上にそこらの物を勝手に拾う様な奴に気なんぞかけんよ」

「遠慮なく食えつったのはテメエだろ。こちとら箸と味噌しか食ってなかったんだ」

「それは食うとは言わんじゃろ」

嘆息して、本題に入る。

「話があっての、なになんてことは無い。百代と対戦して貰うだけじゃよ」

「断る。何がなんてこと無いだ、クソジジイ。思いっきり生命の危険じゃねえか。俺を殺しても保険は降りねえぞ、こら」

「そういう問題かのう」

「あ、蓉馬、どうしたの？」

気づいて、訓練を中断して蓉馬へ駆けよる一子。

ぶっきらぼうに蓉馬は答える。

「どうしたじゃねえ、この腐れジジイ……」

「このくらいでどうかね」

指を二本立てると、とたんに蓉馬の眼の色が変わった。

「何でも無い、どうってことない事だ、うん。やっぱ人間食って寝ているだけじゃ駄目だな、うん。たまには運動もしないとな。まあ、命がけだが、気にする事じゃないな。爺さん任せろ、俺が全力を以ってお孫さんの相手をして見せます」

鉄心は、満足そう頷く。

「うむ、良い返事ありがとう」

「？」

一子は、首をかしげて、鉄心の手を力強く握っている蓉馬を不思議そうに眺めていた。

「え？　お姉さまと対戦する？」

「ああ、そうだよ」

驚きに目を見開かせて、一子。蓉馬はそれを見て、愚かな選択をしたかな、と後悔し始める。

川神百代、世界最強とも言われる女。別名、人間核兵器の申し子。最終決戦人外兵器。腕力が取り柄の原爆落とし女。猟奇的暴力女。

「何か途中からひどくなってきてない？」

「気のせいだ」

と、断固とした口調で言う。

軽く、一子の薙刀を受け流しながら反撃に出る。踏み込み音が体技室に鳴り、また新たな踏み込む音でかき消される。突き出した拳に一子は後退し、威力を減らす。距離を取った所で、構える。蓉馬も構える。

次に口を開いたのは一子だった。

「私と同等なら、お姉さまには勝てないわよ。何で承諾したの？」

「長年の習慣の所為だ」

疑問符を浮かべる一子。蓉馬は説明するとなんか胸の辺りがえぐれそうな気がしたので喉から出かかった言葉を呑み込んだ。仕合を再開する。

跳んだ――前方にとび出す。牽制なのか、薙刀を大ぶりに振るう。三撃目の辺りで、蓉馬はバランスを崩してしまいよろめいた。その

隙を逃さず、一子が薙刀を覆いかぶさる様に振るう。蓉馬は、さして慌てるわけでもなく、ただ平然とそれを止める。
――白刃取りで。
なっ！？　とうめき。驚愕する。蓉馬は相手が正気に戻る前に蹴りを腹に入れる。
相手が吹き飛ばされたのを見送って、蓉馬はガッツポーズをとる。
「よし、やりぃ。これで晩飯のオカズの一品増えた」
「ちょっと待ちなさい。いつからそんなルールになったのよ」
起き上がって、一子が訊く。
「俺が勝った今この時だ」
「汚いわよー！」
「黙れぃ！　敗者は勝者に骨の髄までしゃぶり取られるもんとプラトンより遥か太古から受け継がれる伝統だと決まっているのだ。弱者が勝者に意見するなんざ二百億万年早いわい！　文句があるなら人民法廷に直訴してこいってんだ」
と、力説してると、何か分からない所があったのか、一子が疑問符を浮かべ、それを口にする。
「ぷらとにっく？　何？　プラスチックの仲間？」
「……」
半眼で睨んで、蓉馬は嘆息交じりに呟いた。

「哲学者だ」

「あ、そう、そうよ。哲学者よね、私はもちろん知ってたんだからね。ちょっとあんたをからかってみただけなんだからね」

何処から湧いた自身なのか、無い胸を張って、そう言う彼女を、蓉馬は半眼のまま告げる。確信の下。

「お前さあ、もしかすると。ていうかしなくても」

びしっと指差す。

「馬鹿だろ」

さめざめと涙を流す彼女は、否定してこなかった。

そんな彼女を、蓉馬は見つめる。

「う～、そんな、馬鹿を見る目で見ないでよ～」

「よく分かったな、知能はド低能でも勘は犬並みだな」

「わ～ん！」

泣きじゃくりながら、一子はどこかへ走っていった。

蓉馬はそれを茫然と見送って、やがて、嘆息をつく。

「で？　何の用だよ。晩飯の誘いか。今夜は魚料理の気分なんだが」

「残念だが、川神院は肉料理が中心だ」

物陰から――死角から聞こえるその声に、蓉馬は残念そうに肩を落とした。

「男にしてはまあまあやるんだな」

「まあ、色々あったからな」

その『色々』の部分がやけに気になったが、かぶりを振って追い払う。

彼女――百代は、腕を組んで蓉馬へ訊く。

「私との試合を快諾したんだってな。ジジイから聞いたよ」

「たった今それを後悔してたところだよ」

そこでようやく振り向く。艶やかな黒い髪、影の中にあってなお、それははっきりと見えていた。鋭い刃の様な気配を秘めたその眼が蓉馬を捕らえている、まるで獣の様に。蓉馬は身がすくむを感じた。

いつの間にか、濃密な殺気がこの体技室内に満ちる。試してるのだろう。蓉馬はそう感じた。よろめく体に鞭を撃つように奮い立たせる。冷や汗が背筋を伝う。胸中の不安をかき消すように蓉馬は自制を己に強いる。

幾分かの平静を取り戻し、蓉馬は皮肉気な冷笑を浮かべた。虚勢だが、無いよりはましだ。

見透かしたように、百代は笑みを浮かべた。

「なに、心配するな。もうできない様にしてやるさ」

ばんっ、木製の床を陥没させるほどの踏み出しで、百代は距離を

詰める。
目に捉えられない様なスピード。蓉馬は気づくと全力で背後へ跳んでいた。振り下ろす様に出して拳が鼻先を掠り、空振った。そしてその拳の衝撃が床を破壊する。波紋状に広がっていく衝撃で、空中を跳んでいた蓉馬は飛ばされ壁に叩きつけられた。
五臓六腑に染みわたる衝撃が蓉馬の意識を刈り取ろうとする。
膝を奮い立たせて、蓉馬は平衡を取り戻そうとした。一瞬。その間に構えを取らなければ次の一撃でやられる。
蓉馬は毒づいた。
（ジジイ。二万で足りるかボケエ）
「今のは結構本気だったんだがな。気を込めてこれか。どうやら退屈はしなくて済みそうだ」
構え、百代を見据えたまま蓉馬は吐き捨てる。
「ほざけよ。何が気だよ。そんなもん、どこぞのジャングル男の変態パワーに比べれば、どうってことねえんだよ。テメエにあるか？
どことも知れないジャングルの中で変な仮面を付けたわけのわからん部族の黒人成金野郎に金を踏んだくれそうになるは、全身タイツのもっこり脳みそ筋肉露出狂と殴りあった事があるか？　こっちとらそれらをすべてひっくるめて気も何も使わずに切り抜けてきたんだ」
蓉馬は顔を上げた。口の端を吊りあげて、見上げるように凶悪な相貌で相手を睨む。
そして、百代は見た。それを見て知らずに全身に怖気が走る。
蓉馬の両の金色の瞳が、煌めき、百代を貫いた。

真剣で俺の就職先は何処だ　3（後書き）

蓉馬の過去。まあ、とりあえず、変態共との戦いと受難の日々でしたね。

真剣で俺の就職先は何処だ　４（前書き）

あと一話位で、就職編終わります。

真剣で俺の就職先は何処だ　4

『殺しは、いわゆるアリを殺すのと同じ事だ』

蓉馬はその言葉を聞いて、にわかに信じられない顔をした。まさか、こんな話がこの男の口から出るとは思わなかった。男は続ける。

『殺気もいらない。アリを殺す時だって殺気なんてものを立てないだろ。ただ、アリを踏むのと同じようにただ何となく殺せばいい。アリも人も似た様なものだ。どこか傷ついたりすれば死ぬ。サイズの違いに過ぎない。それでも殺せなければ……』

この時、男は珍しく、笑みを浮かべて。これまた珍しく、冗談じみた事を口にした。

『そのときはお前が殺されるだけだな』

「呑気な事言ってくれるぜ。まったく」

毒づいて、蓉馬は立ちあがった。すでに、身体はぼろぼろに痛めつけられていた。目の前の女、川神百代に。

急に昔の事を思い出したのは、走馬灯だろうか。化け物相手に死でも覚悟したか？

蓉馬は自身へ皮肉気に問いかける。
アリと人間、どこがどう同じってんだ。
（馬鹿馬鹿しい。ようするにあんたはズレてんだよ。致命的なほどにな）
今この場にいない男に、蓉馬は胸中で付け足した。
現実に引き戻す様に、女の声が蓉馬の耳に届く。
「どうしたかかってこないのか」
「うっせえな。ちったあ休ませろってんだ。こちとらヤクザの事務所にちくわ一本で挑む心地なんだからよ」
「わかるようでわからない例だな」
川神百代は、頭がよろしくないらしい。誰でも分かる様な例を提示してやったのにわからないとは、格闘技やる奴と言うのはみんなこう言うのばかりなんだろうか？　と、浮かべていると。
――びゅん。
「いま、ロクでも無い事考えていただろ」
「ナンノコトヤラ」
半眼で睨みつけて来る彼女に、蓉馬はかぶりを振って否定する。殺されかねない。

静謐に包まれ、荘厳さを出していた川神院の体技室は、今はもう二人の激闘（という
か百代の気で）であちこちが陥没し、その面影はもはや、過去の物
となりつつある。蓉
馬は静かに身を落とし、半身を後ろへ退くような構えを取る。百代
は左手を前に突き出
し、右の拳をいつでも繰り出せるようにしている。

飛びだしたのは蓉馬。迎え撃つ百代。が、その顔には、わずかな
驚愕が生まれている

昔からの癖、彼は殺気をあまり出さない。それは師からの教えも
あるのだろう。とに
かく彼は攻撃の時に殺気は出さなかった――そう、まったくと言っ
てよいほど。師は、
殺気を放つのは二流の――自分を制御でいない格下のすることだと
思っていたからだと
言う事を蓉馬は知らない。ただの技法のひとつを思っていた。そし
て、この場でそれは
大いに役立っていた。百代はこれまで――蓉馬にとっては幸運か―
―自分を制御する様な
姿勢の相手と戦った事がない。誰もが戦闘中毒の様に、戦闘中まで
殺気を押さえられる
ようなもので無かったからし、押さえることはできても、それをし
ようとも思わないも
のばかりだったからだ。しかも、蓉馬は殺気だけでなく、その気配
も戦闘の間、常に消
す様にしていた。百代は、やりにくさを覚えていた。

突き出された拳は牽制で、百代はその拳を払い、次弾に用心をした。蓉馬はおそらく
百代は多分、手足のどれかを警戒してるのだろうと読んだ。暗殺者
でもある彼はそれを
上回る手を出した。

百代は、蓉馬へ突きそうとした拳を解いて、その掌で蓉馬を押し
出し、自分も後退し
て距離を開いた。瞼を閉じ彼女はその上から何かを抜いた。

「含み針か……。それと、首の辺りには糸が巻きつけてあるな」

いつの間にか首に巻いてあった細い糸をほどく。
針は抜いたが瞼は開かない。口に含まれてたのだろう。劇薬と言
う事は無いだろうが
しばらくは開かないだろう。あの一撃の間に首の周りに糸を巻き付
け、その上針まで刺
して来たのだ。
おそらく、針は囮だ。急に瞼が開かなくなり、それに気を取られ
てる間に首に巻き付
けた糸で絞殺――いや、気絶か？――する腹だったのだろう。糸が
偶然突き出していた手
に触れてなければ気づかなかった。

蓉馬は腹の辺りをさすった。あの押し出しでここまで、気を削が
れるとは。腹の辺り
にあざが出来てるかなど、痛みで確かめる気になれなかった。

（化けモンの相手なんて御免だってのに……これもみんな貧乏が悪
いんだ、堕ちぶれた

のが悪いんだ。いつか絶対幸せになるんだ）

拳を握る。視線は百代へ向けたまま、蓉馬は、構えなおした。百代も構えを取っている

るここで、ジジイが来てくれないか、と思ったが、そう思い通りにはいかないらしい。

嘆息を漏らす。

川神百代は歓喜で震えていた。

素晴らしき瞬間。今まで、数多くの武芸者と戦って来た彼女は、かつての師と同じ四

天王でしか、相手にならなかった。彼女の両親でさえ、彼女の敵で無かった。

だが、目の前にいる、この男。蓉馬は、今までのどの相手とも違う、戦った事の無い

タイプ。殺人者。今まで、殺人者と戦わなかったわけでないが、

（こいつは、本物だ）

静かに認める。

（不気味だが、強い）

にやりと笑みを浮かべる。

「貴様、一体何者だ？　こんな戦い方をする奴なんて今までいなかった！　こんな人殺

しのような技を使う奴とはな。川神流にだってお前みたいな奴はいない。もう一度聞く

お前は何者だ？　ただの浮浪者じゃないだろう」

「俺は……」

言い淀みながら、苦笑を浮かべる。今更、と思う。

「倖村蓉馬だ。落ちぶれて、彷徨って、金に困って、今ここで怪物娘と対峙している。
くだらないモンを持ってる、しがない落後者だ」

「そうか、なら、もう聞く事は無い。ケリを着けよう。もうすぐジジイが来る頃なんで
なあのジジイ。どんなに遠くにいても十五分くらいで来るんだ」

「できれば、十五分ほど小休止を挟みたいんだが。コーヒーブレイクでもいいぞ。うま
い茶菓子――主に腹の膨れそうなモン――を出してくれんなら、なおいい」

「却下」

やっぱりな。

蓉馬は懐から、拾った箸を二つ投擲した。投げつけた箸は二つとも払われる。が、百
代はその内の一つを掴み、投げ返した。蓉馬は腕でそれを受け止める。気を纏った箸は
槍のように鋭くなっており、腕に少し突き刺さった。苦痛に足を止めそうになるが、蓉
馬は駆け出した。百代も駆け出す。

近づくにつれ、凄まじいプレッシャーが襲う。

（殴りあいはこっちが圧倒的に不利だ）

歯を食いしばり、己の身体を横へ逸らした。軋む身体、蓉馬は堪え、急な方向転換で倒れないように身体を抑えつける。

百代は反転して追撃をする。蓉馬は、かわせずにその攻撃を上腕で防ぎ、続けての頭突きはもう片方で受け止めた。突き刺さった箸がさらにえぐられ、激痛が走った。

それらは予測済みだったのだろう。百代は気を纏ってナイフの様な切れ味をもった手刀を、蓉馬の手から離した頭と代わる様に斬り上げてくる。第六感が働いたのか、彼は手刀が当たる直前に顔を逸らしていた。直撃は免れたが、左目に痛みが走り、視界が閉ざされた。

百代はその一瞬――蓉馬が見せたその隙を見逃さなかった。

彼女は足を振り上げ、蓉馬の脳天へと命中させる。脳を揺らされ、蓉馬はよろめく。

すかさず、百代は攻撃を続ける。胴体へ三発。肩、顔面に四発ずつめり込ませていく。

とどめを刺そうと、心臓部への一撃を入れようと、力を込めたその瞬間。

彼女の眼の前から、蓉馬が消えた。

驚愕する。が、すぐに自制を取り戻す。気配が消えたこの状況に困惑しつつも、百代は勘を働かせる。

この時、即座に自制を取り戻したのが幸いしたのだろう。
死角からの一瞬だけの気配に、機敏に反応を示した彼女はその方向へ視線を投げる。
すぐ眼前に、蓉馬が迫っていた。
突き出される貫手をかわす。が、本命はそれで無く彼女の眼を狙った眼つぶしだった
寸での所で、百代はそれを頭一個分逸らす事で事無きを得た。
瞬間、足首に衝撃が走る。踏まれたのだ。

（！　さっきまでのが囮で、こっちが本当の本命）

転がる様に後退する。足はつながっていた、が、挫傷は免れそうにないだろう。
何とか体勢を直して、百代は蓉馬の動きを警戒した。殺人者は先ほどまでと同じように中腰のまま身構えている。気配はいまだに、薄いままだ。良く見ると、腕は少し下がっており、その下には、血の池が出来ている。突き刺さった箸が栓代わりになっているが、あのままではいずれ倒れるだろう。
次で最後だ。
相手も己の窮状を察したのだろう。蓉馬が動き出す。百代はそれを迎え入れる。
三撃の拳を最小限の動きで捌き、こちらも蹴りで応戦する。気をまったく使わない相手でこんなに苦戦するとはな！
蓉馬の動きは素早かった。腕力はおそらく一子にも満たないだろうそのハンデを、彼は素早い動きと的確に相手の急所を狙ったり、と見せかけて、死角からの攻撃、といっ

た具合に、蓉馬は徐々に押し始めていた。
百代はその中にあるものを感じていた――少しでも隙を作り必殺の一撃撃つ。
百代は無視して飛びこんだ。上等だ、相手が必殺の一撃を撃とうというのなら、作ってやろうではないか。
乾坤一擲。百代は正面から、蓉馬へ向かう。

踏む込んでくる百代はあまりに無防備だった。
誘ってるのだろう。訝ることなく、蓉馬はあっさり判断した。彼もまたそれに応えようと、思った。
子供騙しな牽制を止め、蓉馬は右拳を突き出した体勢で百代の懐へ飛びこんだ。
奇妙なその構えに百代は訝ったが、すぐに己の作業に集中する。拳を引いた。百代が吠える。

「川神流零距離星砕きぃぃぃぃぃぃっ」

蓉馬は、この場、全ての雑念を捨てる事を己に命じた。気にするな、集中しろ、己の技に！　この時、蓉馬は懐かしくもある様な感覚に包まれた。
百代の腹部に拳を当てた。
刹那。
激しい弩音が鳴り、二人は同時に吹き飛ばされた。
互いに、同時に同じ威力の技がお互いに同時に命中したのだろう。
蓉馬は地面に投げ捨てられ激しい衝撃が己の体内を駆け巡るのを感じた。
視界がぼやける。すぐに視界が晴れ、蓉馬は瓦礫と化してしまっ

た体技室の木片につ
かまって立ち上がった。
見ると、百代も立ち上がっている。血の滲んだ唾を吐き捨て、蓉馬を睨む。
二人は近づいた。ゆっくり、ゆっくりと、一歩づつ。そして、互いに息がかかるほどまで近づいたところで立ち止まった。今だ、視線は交差している。
やがて、出血のしすぎか、蓉間が前のめりに倒れ込む。百代はそれを抱く様に受け止める。穏やかな寝息と共に、おそらく、この騒ぎに勘付き、駆けつけてきた用事で出て
いたここの師範とジジイの足音らしきものが聞こえる。その中で、一際小さく、低い声
が、百代の耳に届いた。
その声は、いつもの皮肉気な調子で、

「……何で無傷なんだ？　化けモンめ」

と、聞こえた。

「最近肩が重い気がする。あれだ、憑いてんだ。最近ろくな目に待ってねえからな。きっと疫病神が団体で憑りついてんだ。現に目の前にその総締めがいるしな」

「誰が疫病神の総締めだって？　ちんぴら」

冷やかに、百代は包帯を全身に巻いて、川神院のベッドの上で寝込んでる蓉馬を見つめる。彼女自身は、『超回復』で頬に絆創膏を張るだけに済んでいる。

「誰がちんぴらだ、この殺人狂め。あと一歩で死ぬ所だったぞ。慰謝料払えよ」

「美少女の頬を殴って置いて、その上慰謝料の請求か？　人間の屑の様な発想だな」

「ほざけよ？　美少女自称するんだったらまず鏡で覗いてから出直してこいよ。さぞかし凶悪なツラが拝めるだろうぜ」

「ほお、貴様に殴られてしまったこの顔を見ろと？」

「感謝して欲しいモンだな。この俺の拳がテメエの面をちったあ人前に出れるようにしてやったんだ。感謝されても良い筈だぜ」

ベッドから顔だけを覗かせて、蓉馬は頬の絆創膏を貼っている百代を睨む。

（つか、決まったのに何でこいつは絆創膏のみなんだ？　痣一つ出来てねえぞ）

不気味な笑いがこだます。

「へへへへへへへっ」

「ふふふふふふっ」

丁度、見舞いと言う名目の暇つぶしで来てたメンバーは、その様子に唖然としていた

「よく生きてるな、あのモモ先輩の攻撃を喰らって。しかも、あんな目に合わせられたのにあんなふうによくもまあ言えるな」

ガクトは素直に称賛した。
圧倒的な強さを持つ彼女に、あそこまで罵倒の言葉を投げるような命知らず、メンバー内にだっていないのだから。

「なんだかすごいのが来ちゃったな」

「口の悪さだけは世界チャンピオンだね。でも私はあんな言葉ヤマトから言われてもいいかも」

「そーだな。姉さんとやりったっていうその無謀さもすごいけど、あそこまでオブラートに包まないのもすごいな」

モロ、京、大和がうめく。
ちなみに一子は百代と蓉馬の間で二人を交互に見て、あたふたしている。キャップはまたどこかに旅を出てしまい行方不明。
扉が開き、怒号を上げながら鉄心が入ってくる。

「こらあ！　二人とも、静かに……」

「「黙ってろクソジジイ。茹でダコにされて売り飛ばされたくなけりゃあ大人しくおむつ替えでもして貰ってろ」」

「息ぴったりだなお主ら！」

「るっせえジジイ！　おいこら、その机の上を見ろ」

蓉馬は机の上にある、二つのものを指した。

「なんだよこれ！　『川神鉄心。武道のススメ。第二巻』？　あんまりふざけてっとそのひげぶち抜くぞ」

「あんだけ道場破壊されたんじゃ。払う金などありやせんわ！　弁償してほしいぐらいじゃ」

「俺のせいじゃねえ！　てめえのその頭髪と同じくらいに脳足りんな孫娘がぶっ壊したんだ！　むしろ俺はてめえの策略に乗せられた被害者だ」

「こら、お前私を売る気か！」

「うるせえ！　事ここまで及ぶと俺一人助かるだけで精一杯だ。俺の事は気にしなくていいからお前ひとり不幸になってこい」

「ふざけるな、お前も道連れだ！　ただでさえ今借金があるんだ。これ以上背負ってたまるか」

「はっ、笑わせんな。てめえの借金なんざ耳くそみてえなもんじゃねえか！　俺の借金の額を聞いて腰抜かすなよ」

「貴様らいいかげんにせんかぁあああああああっ！」

鉄心の怒鳴りが気を纏い、病室内に響き渡る。気の衝撃が百代と蓉馬。メンバーをも巻き込む。鉄心のお得意の、問題児を押さえつけるときに使われる。全員が黙り込んだ

「まったく、お主らは……。今回は不問にしてやるが今度はそうはいかんぞ。ところで蓉馬、お主就職先を探していると言っておったな」

蓉馬は頷く。

「金は払えんが就職先を紹介してやるわい」

そして、鉄心は告げた。蓉馬は神妙な心地でそれを聞いた。

真剣で俺の就職先は何処だ　４（後書き）

風邪をひいてしまいここまでです。次回はもっと遅くなってしまうかもしれません。すみません。

就職先どうするかまだ決まってないので何か案を出してくれたらありがたいです。一応、忠勝の手伝いの何でも屋もやらせようかと思ってます。
川神学園にも編入させたいけど、クラスどうしよう。これも意見がありましたらよろしくお願いします。

ちなみに時期は春休み頃のつもりです。

真剣で俺の就職先は何処だ　終（前書き）

キールです、お待たせしてすみません。また最近風邪、というか体の具合が悪くなってしまい遅くなってしまいました。

真剣で俺の就職先は何処だ　終

「まったく、まるで犯罪者のような経歴だのう」

川神鉄心は、うなだれるように言った。手元の資料にはある男の詳細なデータが記されている。鉄心はそれに視線を移すと、また嘆息を漏らした。

「倖村蓉馬、年齢一六。経歴――私文書偽装、年齢詐称、建造物侵入、無銭飲食、借金の踏み倒しで逮捕され脱走するの繰り返し。一度少年院に送られるも、看守、囚人含め、半殺しにした挙句に建物まで破壊。本人は無実を主張してるが、証拠が無いのと言ってることがあまりに突拍子もないため当局はこれを虚言と認識、以後、監視付きの独房に送られるが、またも脱走。以後の足取りは不明。踏み倒した借金の額もすごいの、三百万。どんな借金をしたらそうなるんじゃ？」

哀愁を漂せながら、蓉馬はうめいた。

「いろいろあったんだ」

と言いそうだのう。鉄心はほくそ笑んだ。

今、彼はこの場にいない。島津寮へ入居の手続きに行っている筈だ（途中で何らかのトラブルに巻き込まれてない限り）。髭を撫でながら、鉄心は物思いにふけった。鉄心の手には、総理に頼み、入手した彼の情報があった。彼はそれを見、頭を抱えた。

ただでさえここにはドでかい爆弾があるのだ、これ以上は抱えきれない。だが……

『すまないが師匠、当分の間そいつを預かってもらってくれねえか？　公共事業費がそいつの破壊活動のせいで年々減ってるんだ。施設にぶち込んでも壊されるだけで無駄金を生むだけだしな。川神院ならそんな心配いらねえし、そいつの破壊活動を抑えられるんだろ……扱いに慣れてるだろ？　そういうのには』

思い出して、苦々しく顔を歪める。鉄心は、深いため息をついて、うめいた。問題児がさらに増えてしまった。

と、鉄心は案件を頭の隅に追いやり、もう一つの案件に向いた。

「ルーか」

「ハイ」

向くと、緑のジャージに身を包んだ男が、近づいていた。歳は確か三十過ぎたぐらいだろう。その年で童貞というのも可笑しい話だ。皮肉を浮かべ、鉄心は促した。

「で？　どうだったかの」

「ハイ。彼の戦い方ですが……百代から聞かせてもらって、あれから調べたのですが。『拳が触れた途端、激しい衝撃が内臓へ気を纏った防御壁を通り抜けて伝わった』と彼女は言ってましタ。彼女のダメージからして彼の体格からでは確かにありえない威力でしタ。超回復を使ってなお、彼女の体に痛みを残してましたから」

「もったいぶるのはお主の欠点じゃな。はよう結論を言わんかい」

ルーは縮こまったように続けた。

「はい。彼女の言っていタ『防御の上から通り抜けた』ですが、おそらく彼の放ったのは『勁』の技かと思われます」

「なんと！？　『勁』の技とはな」

川神流の武術は『気』を奥義とする。人間の生命エネルギーを体外に放出させ、不可視の力を流動エネルギーとして活用し、物理的な作用をもたらせる。身体に纏わせれば鉄よりも強固な鎧。撃てば破壊の弾丸。万物の構成を司る力も持ち、治療にもその力を発する。百代の超回復はその究極と言ってもいいだろう。

勁とは、エネルギーではない。言わば、体の生み出す運動量のことを指す。重心移動によって、接触面――この場合拳だろう――にまで運動量で生み出された力を導き、作用させる。

「梁山泊か？」

「イエ、聞いてみたところ倖村蓉馬という男に該当することはないと否定されましタ」

梁山泊では殺人術など教えていない。彼の戦い方は殺人者のそれに近い、だとすると彼がその業を得たのはまともな場所ではまずないだろう。

「本当にあの男は何モンじゃろうな」

川神院から、少し歩いて、その寮はあった。少々古めかしいが、立派な佇まいで、立札には『島津寮』と書かれている。

純和風の造り（川神市の住宅は大体そうだが）の家の前、いきな

り蓉馬は膝をついた。

「ど、どうした？　蓉馬」

大和が問う。蓉馬は恐れおののく様に、体をわなわな震わせる。

「お……お……うおお、お、お……」

蓉馬は天を仰いだ。空はどこまでも澄みきっていた、なんてことはないただの青空だ。

「神よ、これは何かとてつもないことの前兆か、これ以上俺にどんだけ試練を与えるっつんだ？　俺にはもう何も失うもんなんかねえぞ」

瞳から色を失い、虚ろにさせながら、蓉馬は続けた。

「これは夢か？　夢に違いねえ！」

咽び叫ぶ蓉馬を見かけて、訝しげな目をしながらこの寮の管理人らしき夫人が出てきた。蓉馬に指を指して大和に聞いた。

「なんだいあの子？　なんか叫んでんだけど」

「気にしないでください。なんか気に触れたみたいなんで」

大和は、麗子にさらりと告げた。

「俺に安住の地だと！　しかも、屋根付きの家だ！　雨風を段ボールと葉っぱでしのいでいた俺が……草と割り箸に味噌で生き抜いた

俺が、定職ありの上にちゃんとした衣食住付きだと……欠陥じゃなくてだ！　文明開化か、文明生活を告げるルネッサンスか？　それとも明日俺は死ぬのか？　は、魔王が君臨するのか！　それとも恐怖の大魔王、バルプ大王ファッジ一世が……」

「……今日は御馳走作っておくよ」

「お願いします」

大和は寮へ戻っていく麗子を見送って、蓉馬へと視線を転じた。いまだにトチ狂ってる蓉馬。静かに大和は彼の背後に回った。

「てい」

「ぐはっ！？　あ、大和か、なんだ、俺はいったい何していたんだ？」

目の焦点が合った蓉馬に、爽やかに大和がその疑問に答える。

「気にするな。悪い夢を見てたんだ。さて、寮に入ろうぜ」

誘われるまま、蓉馬は寮に入った。内装は掃除が行き届いており、外観ほどの古さを感じない。

見ていると、階段から誰かが下りてきた。

「大和。そいつは誰だ」

入って現れたのは、ぶっきらぼうに吊り上った目つきの男。

「あ、ゲンさん。こいつは新しく島津寮に入ることになった」

「倖村蓉馬。まあ、よろしく」

「源忠勝」

忠勝は、値踏みするように蓉馬を見る。蓉馬もその眼を睨み返す。凶相で、お世辞にも愛想がいいとは言えない様な風貌。背は、やはり蓉馬よりも高く、そのため蓉馬が忠勝を見上げる形になっている。

最近聞いた話だが、蓉馬が百代と試合したことが結構有名になっているらしい。久々の強敵という触れ込みで。その所為だろう、忠勝の蓉馬を見る目に警戒の色が浮かんでいるのは。

「お前か、新しい代行屋は。学園長から話は聞いてるぜ。なんでも餓えた肉食獣のような男が代行屋になうかもしれんってな」

「あのジジイ、今度会ったら髭全部むしり取ってやるからな」

拳を固め、悲壮な決意を蓉馬は人知れず固めた。

「何でもいいけど、面倒事だけは起こすなよ。起こっても俺は助けないからな」

「ああ、わかった。警告として受け取っとくよ」

そう言い残して忠勝は外へと出て行った。

去った後に、こっそりと大和が耳打ちする。

「あんなんだけど、根はすごいいい人だから」

大和が付け加える。蓉馬はそうか、と返して、ふと天井を見上げ

た。

「どうしたんだ」

「いや、なんでもない」

蓉馬はかぶりをふってそう答える。ふと気になって聞く。

「なあ、大和。上の階には誰かいるのか」

「え？　最近入ってきた人がいるけど……どうした？」

「そうか、いや別にどうってことはないけど」

もう一度、天井を見上げて、一瞥して、蓉馬は先へ進んだ。付き当たって曲がると、一つ、空いた部屋があった。

見ると、二畳半の小ざっぱりとした感がある。必要な物は自分で調達しろということなのだろう。襖の向こうの押入れに布団が一つだけあった。

「じゃあ、今夜六時に食堂に来てくれ。今日はちょうど新入生歓迎会があるからお前も来いよ」

「ああ、いろいろすまないな」

大和の礼を述べて、蓉馬は鉄心から持たされた荷物を開けた。

彼が学園長を務める、川神学園の制服。それを広げ、しばらく眺めた。

（学生ねえ、俺が学生か。世の中どう転ぶかわからんな）

立ち上がって、蓉馬はあらためて部屋を見渡した。空いた窓からは、まだ肌寒さを孕んだ風が吹いてくる。頬に打ち付けられるような冷たさを感じながら、蓉馬はしばらくそこに立ち尽くしていた。

真剣で俺の就職先は何処だ　終（後書き）

勁についてそこまで詳しく考えてません。なんだかんだ言ってますが、気とおなじように見ても何ら問題はありません。エネルギーを運動量に置き換えただけですから。

ちなみにこの作品はコメディなのでシリアスは極まれにしていきます。オリキャラなんだかんだで謎が多いですけど、それだけです。

真剣でてめえら俺と関わるな　1（前書き）

更新が意外に早くできた。普段もこの位できればいいんですけど……。

真剣でてめえら俺と関わるな　1

うららかな春の日差しが彼らを包む。そして、なんとなく理解した、そう、今は春だったのだ、と。

平和なひと時とはまさにこの時だろう。蓉馬はそう思った。長めの黒髪に、少々痩せ気味な体格。普通の学生然とした少年であるが、前にたれた髪の向こうに輝く、異形の色彩を放つ金色の瞳が、彼を異常さが目立つこの街に溶け込ませている。

だが、今はそんなことお構いなしに、気の抜けた顔をしている。

「あー、平和だ。いつまでもこんな日々が続けばいいのに」

「そーねえー。あー、ぬっくい」

隣で同じようにくつろいでいる一子が、どこか幸せそうな、平和を体現したような呟きを漏らした。小柄な体格に、どこか幼さが残った少女だ。尻尾と犬の耳が見える気がするが、彼女はれっきとした人間である。

「こんな風に普通に過ごすには何年振りだろう……確か」

「やめて、アンタの昔話を聞くとせっかくの気分が削がれるから」

なんとなく引っ掛かりを感じたが、納得して蓉馬は話すのを中断した。確かにこんな時に昔話など無粋というものだろう。

再び、このまどろみに身をまかせようと、目蓋を下すと――

「何してんだ？　お前ら」

怪訝そうに忠勝が見つめている。
ぶっきらぼうな目つき、彼が人を見るときは誰に構わずいつもこんな感じだった。だが、そんな見かけと違い面倒見が良いことを、数日の研修で知った。
彼と蓉馬は、”代行屋”と言う何でも屋の同業者であった。依頼の増量で忠勝一人では手が回らなくなったので新たに、就職活動中の蓉馬が加えられることになった。向こう十年間、ただ働きすることで彼の衣食住の保証と借金の肩代わりが条件づけられ。
蓉馬は半分寝ぼけながらも、顔を上げて忠勝を見返す。

「んー、日向ぼっこ？」

「タっちゃんもどお？　気持ちいーよ」と、ぼんやりとした声で一子。

彼らのこのありさまに、忠勝は頭を抱えた。

「お前らは……。グダってねえでシャンっとしろ」

「いいじゃねえか。一子だって偶にはこうしていたい時があるんだからよ」

「お前もだボケ」

「んなこと言ってもよお、俺今仕事もねえし」

「それでお前に客だ。おい、入ってこい」

招かれて、入ってきたのは痩身でひょろっとした印象の男だった、おぼつかない足取りで、杖をついてふらふらと歩いてくる。男はよ

れよれのスーツを着て、いかにもアジア系ブローカーのようであった。

”斡旋屋”。別名、仲介屋としても知られる男だ。この斡旋屋は代行屋などの裏稼業と客の間を仲介する男である。

蓉馬は寝ぼけた目をはためかせ、向き直った。

「それじゃあ、俺も忙しいからな。あとは自分でどうにかしな」

そう言って背中を向ける忠勝に、蓉馬は礼の言葉を投げる。「はいはい、あんがとよ」

蓉馬は頬杖ついて男を見上げた。涼しげに、のっぺりとした顔立ちでいまいち感情が読めない。男が切り出す。

「では、仕事の話に……」

「断る」

「まだ何も言ってないぞ」

怪訝そうな男に、蓉馬はうんざりとした口調で告げた。「この間お前の依頼を受けて散々な目にあったんだ。なんだよ子猫さがしって、子猫じゃなくてヤクザの女探しじゃねえか！」

「アンタ、そんなことやってたの？　どうりでしばらく姿が見えないと思った」

「昔から女は子猫ちゃんと言うでしょうが」

「黙っとれ！　しかもその女いろんな一緒に寝たヤクザから金盗ん

でるとんでもねえ女じゃねえか。数人のヤクザと乱闘した傷が今だ残ってんだぞ。しまいにはそいつの送り先が北海道の田舎だと。列車に乗り込ませるまでどんだけ苦労したと思ってんだ！　そのあとも連日連夜戦い続ける羽目になるわ、もう二度とてめえの依頼なんざ受けねえからな」

「じゃあ、川神鉄心氏に金を返すことだね。そうすればアンタは自由だ。この依頼は川神鉄心氏からのなんでね」

「ちくしょう！　喜んで受けさせてもらいますっ」やけっぱちに叫ぶ。そんな蓉馬に、”斡旋屋”は満足げに頷く。ただし、にこりともしない。

「うむ、そんな君が私は大好きだよ。段々代行屋が板についてきたじゃないか」

だらけた姿勢のままで一子。「はたから見たら情けないわね」

「うっせえ。で、どんな依頼だよ」

立ち上がり、あらためて、蓉馬は依頼を聞いた。

依頼を聞かないという選択権は最初から存在しないのだ。見えない鎖でつながれている限り自分は依頼を聞くしかない。さもなければ、のたれ死ぬか。

そんな蓉馬を見透かしたように”斡旋屋”は後を続けた。

「今日の依頼は簡単さ。あなたにはある人物を見つけてもらいたい」

怪訝そうに、蓉馬は訊いた。

「手がかりは？　当然何かあんだろ。無策でやらせるほどあのジジイは無能でもねえだろ」

蓉馬に勝るとも劣らない皮肉気な笑みを浮かべて、”斡旋屋”は答えた。胸から紙を取り出して。

「時間は深夜。場所は――」――ケーキが出されて、楽しみが抑えられない子供のような声で”斡旋屋”はその場所を言った――「歓楽街」

真剣でてめえら俺と関わるな　1（後書き）

作者てきに蓉馬と一子のコンビが気に入ってます。何故か、蓉馬と絡ませやすい。うーむ、謎だ。

リアルが修羅場なのでまた遅くなりそうです。すみません。

てか、普段の生活が常に修羅場なんだよな……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8772x/

まじこい　～金眼の男～

2011年12月17日00時45分発行